

〈ケア〉を考える会 (第108回)

■日時：2016年7月24日(日) 13:30~17:30

■会場：京都市山科区安朱中溝町3-2
山科駅より東 徒歩3~4分の民家
(山添)(安朱保育園 東隣)

■当日の大まかな予定

13:00 → 有志集合…会場準備等
13:30~ → 学習会(読書会)
15:30頃~ → 懇親会(笑いヨガなども)
17:00~17:30 → 片付け、終了
(その後で、名残惜しコーヒータイム?)

■内容

(1) 学びの会(読書会)

鷲田清一著『老いの空白』(岩波現代文庫、2015年刊)

— 7「いるだけいい」「いつ死んでもいい」と言い切れるとき —

P.179~215 をもとに語り合います

(2) 懇親会…食べながら飲みながら語り合います(持ち込み歓迎)

※山添さんご夫妻の手料理は絶品です。

※懇親会参加者で実費(1000円程度)ご負担願います

★参加申し込み、問い合わせ、メーリングリスト登録希望

⇒ 林まで：884michiya@gmail.com 090-5366-1497

★どなたでも参加できます。初参加歓迎。飛び入り参加、突然参加もあります。

★読書会は、本を読んでいなくても気兼ねなく参加できます。読んできてほしいけど……。



▼おたがいの言葉を手がかりに考える時間をもつこと、確かめながらゆっくりと考える時間を共にし、分け合う
「考え」でなく、「考え方」をお互い共有してゆく
結論はありません
プロセスをゆたかに

(長田弘『なつかしい時間』P.191)

鷲田清一『老いの空白』ノート「6 肯定と否定のはざままで」

▼老いゆく過程で、ひとは……「できなくなった」という事実をやむなく受け容れてゆく。……

〈老い〉とともに、ひとは人生を「できる」ことからではなく、「できない」こと……から見据えることができるようになる……

何をするか……というよりも、じぶんが何であるか……という問い、さらには自分がここにいるということの意味への問いに、より差し迫ったかたちでさらされるようになる。

ひとの生を「する」ということを基準に考えるかぎり、老いるということはひたすら「する」世界が縮小してゆく過程をたどることだ (P.150~151)

▼例えば極限的な身障者、……そういう存在は……結局「ある」ということなのです。「ある」こと自体が価値だということを示しているのです。ところが「する」という眼差しから、この極限的な身障者を見たときには、全く価値がないということになってしまいます。(芹沢俊介著作より引用)。(P.152~153)

▼べてるの家は、「ある」という視点から、「する」を基準とする社会を撃つ試みである。(P.155)

▼ケアにおける「専門性」——臨床における「専門性」というのは、事態の推移のなかでいつでも「専門性」を棚上げする用意があることだ……。が、……専門性を捨てる用意があるだけでなく、専門性を捨てなければならない。……(そして)ある瞬間、脈絡を読み取ってばっ(元の専門職に)戻れるというのがほんとうの意味での専門性ではないのか。(P.175~176)

ひととひととの関係において重要なのは、各人が主体的にどのようにしようとしているかではなく、いつとはなしにお互いが心を開いてしまっているという事態である。

(池上哲司『傍らにあること』P.169)



人であれ、物であれ、いのちを限りのほうから、終わりのほうから見る。そのことで、わたしたちはじぶんのいのちが他のいのちとの交換のなかにあることを知らされる。

(鷲田清一『老いの空白』P.227)

「〈ケア〉を考える会」ホームページ

<http://care-kyoto.jimdo.com/>

「〈ケア〉を考える会-岡山」

<http://okayama-care.jimdo.com/>